

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団
2016年度（前期）一般公募 「在宅医療研究への助成」 完了報告書

「重度要介護高齢者を支える家族介護者の介護生活体験に関する研究」

申請者：三ツ田 枝利香

所属機関：大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻臨床哲学分野

提出年月日：2017年8月30日

【研究テーマ】 重度要介護高齢者を支える家族介護者の介護生活体験に関する研究

【研究背景】

研究担当者は、急性期病院の神経内科病棟で5年間看護師として働いた経験がある。その中で、神経難病や遷延性意識障害を抱えながら在宅療養生活を送る重度要介護高齢患者とその介護を行う家族が、様々な経験や思いを持って生活をしていることを実感した。病院では、施設入所待ちや転院待ちが多く、家族が重度要介護状態である患者を在宅で看ることを選択できていること自体がまれであると感じた。彼らがどのような思いや状況で在宅介護を選択し継続しているのかを探り、専門職としてどのように彼らを支えることができるのかを検討したい。

また、介護保険法成立により介護が社会化されたようにみえたが、再び家族への介護負担が増えることが予想される。さらに、2025年には日本における後期高齢者数が人口全体の1/3を占めると危惧され、在宅医療・介護推進といった政府の方針がある。そのような社会背景のなか、介護の負担にばかり焦点が当たるが、実際に介護とは、負担だけであるのだろうか。改めて在宅介護の意味を捉え直す必要があるといえる。家族介護者に関する先行研究でも介護負担やストレスといった面に着目した研究が多くアンケート調査やインタビューによるものが多い。認知症患者の家族介護の実態を明らかにする研究はあるが、重度要介護者高齢者に関するものは少ない。

以上のことから、本研究により、重度要介護高齢者の在宅介護を行う家族に焦点を当てて彼らの思いや状況を把握し、専門職として彼らをどのように支えていくことができるのかを検討することで、今後の在宅医療推進における家族介護者支援への一助になると考える。

【研究目的】

本研究では、重度要介護高齢者を支える家族がどのように在宅介護生活を選択し継続しているのかを明らかにし、彼ら（重度要介護高齢者とその家族）の在宅介護生活に対する思いや状況を多様な視点で捉えることを目的とする。さらに、家族介護者の在宅介護生活に対する思いや状況を踏まえた上で専門職（看護師、介護士、理学療法士、作業療法士、ケアマネージャーなど）が彼らをどのように支援することができるのかを検討する。

研究を進める中で、研究対象を広げざるをえなくなった。在宅医療・介護現場を捉え直すためには、家族介護者だけの体験では捉えられないと考えたからである。そこで、家族介護者の体験だけに焦点を当てるのではなく、在宅医療・介護現場が一体どういうものであるのかということを訪問看護師としての研究者（以下、私とする）自身の体験を通して明らかにすることとなった。したがって、本研究の重心は、私が一訪問看護師として、Tさんが自宅で暮らすことを支えることができるようになってきたと感じられるようになった過程を記述することに置かれることになった。そのことにより、在宅医療現場の実際を伝えることができ、今後の在宅医療・介護推進の中で訪問看護師として何ができるのか（看護師として療養者、家族、他の専門職との関係性を築きながら、ケアをするとはどういうことなのか）を検討する機会となる。

【研究方法】

重度要介護高齢者の在宅介護者である家族の生活現場において、①参加観察（家族の活動に共に参加し、その状況について観察する）、②非構造化インタビュー調査（いくつかの質問を用意し、それらに対して自由に回答してもらう）を実施した。

具体的には、Tさんが自宅で生活する様子を訪問看護師としてケアをしながら、参加観察をさせてもらった。①の結果を元に、私が訪問看護師としてどのように変化していったのかを②で得られたデータを参考にして記述しながら解釈を進めている。エスノグラフィーの手法、現象学的記述、エピソード記述といった方法を手掛かりに解釈した。本研究では、これらの3つ手法を組み合わせるスタイルを試みる。以下にそれぞれの方法の概要を述べる。

〈エスノグラフィーについて〉

エスノグラフィーとは人びとが実際に生活したり、活動したり、仕事をしたりしている現場を内側から理解するための調査・研究の方法である（小田 2013）。これは、調査方法論であり、そのプロセス（過程）とプロダクト（成果）の両方を指す（藤田・北村 2016）。具体的には、①その対象についてフィールドワークという方法を使って調べた研究、②その調査の成果として書かれた報告書、という二つの意味が含まれる。さらに、文学と科学という二つのジャンルにまたがる性格をもつ文章であり、また、そのような文章を作るための調査法でもある（佐藤 2010）。このような点から、本研究においても有用な研究方法と考える。

〈現象学的記述について〉

本研究では、参加観察をしたフィールドノートとインタビュー調査の内容を現象学的に解釈し、現象学的研究を行う。現象学的研究とは人間の経験とその背景をその運動と生成において、生成や構造を探求することが目的である（松葉・西村 2014）。私の研究において、現象学的な視点のどのような部分が重要と考えられるのかについて以下に2点挙げる。

1) 内側からの探求

現象学的研究は、事例の固有性を掘り下げることによってその事例の一般化可能な本質を見出すことや数値化できない部分、類型化できない部分をとらえることを目標としている（松葉・西村 2014）。今回の私の研究でも、その視点が必要であると考えている。先行研究では、在宅介護に対して、負担感や肯定感など、研究者の視点により主に2つの視点を取り上げて研究されている。そうではない在宅介護の有り様を描き出すためには、現象学的アプローチが適していると考ええる。

2) “1回性”や“個別性”を重視する

また、現象学的研究は、単に事象の細部を掘り下げるだけでなく、その細部の連関を明らかにすることによって、背後でそれを支える運動や構造を取り出すことが必要であると言われている。一回性、個別性の中にこそ、重大な構造が隠れていると強調され、それにより他の人とも共有可能な普遍性を獲得することができると指摘されている（松葉・西村 2014）。よって、私の行っている一事例を通しての研究も意義があると考ええる。

〈エピソード記述について〉

エピソード記述は、現場に携わる実践者や当事者たちが自身の経験を振り返り、その経験がどのような意味をもつのかについて考察する手段である。

エピソード記述には 3 つのアプローチ方法がある。①現象学的アプローチ、②臨床的アプローチ、③間主観的アプローチである。①では、「生きられる還元＝自分の意識や存在のあり方にまわりついている様々な自明なものが、出会いの場ではと気づかされる形で急に浮き上がってくるような経験」がキーワードである。②では、①の理性的で反省的な次元で為される還元に対して、感性的な次元で起こされるもう一つのものとして臨床的還元を位置づけている。③では、相手の気持ちを受動的に感じ取られる体験を間主観的な把握と呼んでいる。以上のことも踏まえて、エピソード記述とは、研究者が自らの身体や感性を介して受動的に感じ取った主観的体験を考察の対象とし、その意味を記述しようとするものである（鯨岡 2005）。

参加観察時やインタビューで印象に残った場面についてエピソード記述をし、研究の一部として活用できると考える。また、研究と実践の両方を兼ねる場合に、客観的に実践者としての自分を見る研究者の視点を保つことに活用できると考える。

【研究協力者について】

研究協力者は、重度要介護高齢者（92 歳女性、要介護 5）T さんと彼女を支える人達である。具体的には、T さんを支える娘 A さん、介護福祉専門員（いわゆるケアマネージャー）C さん、理学療法士 D さん、先輩看護師 E さん、歯科医師 F さん、歯科衛生士 G さんには、同意書を取って、30 分～1 時間程度の非構造化インタビューを 1 回ずつ行った。T さんの孫 B さんにはインタビューはしていないが、研究に関して説明をし、了承を得ている。また、他に医師 H さん、訪問入浴スタッフ数名、訪問介護員（いわゆるヘルパー）数名とは、研究者としてではなく、訪問看護師としてともに T さんを支える仲間である。

【研究期間】

事前調査として 2016 年 5 月から 10 月までの半年間、本調査として 11 月から 2017 年 5 月までの 7 ヶ月間に参加観察を実施した。倫理審査承認後にインタビュー調査を実施した。以下にインタビュー調査の日程を示す。

1. 2016 年 10 月 20 日 理学療法士 D さん	4. 11 月 13 日 看護師 E さん
2. 10 月 25 日 歯科医師 F さん	5. 11 月 15 日 歯科衛生士 G さん
3. 11 月 10 日 介護福祉専門員 C さん	6. 2017 年 1 月 9 日 娘 A さん

【倫理的配慮】

本研究は、平成 27 年度大阪大学研究倫理審査委員会で審査を受け承認を得た（R 人 13-3）。研究協力者に対して研究への参加は自由意思を尊重すること、参加しなくても不利益がないこと、個人が特定されないことなどを説明し、文書による同意を得た上で参加観察、非構造化インタビュー調査を実施した。

【結果】

重度要介護高齢者を支える家族は、在宅介護生活を選択するのではなく、元々、自宅で“一緒に普通に暮らしている”という思いのもとで、在宅介護生活をしていることが明らかになった。その中で、今回は2016年5月から2017年5月までの13ヶ月間を通して、Tさんが2回の入院を経て、周りのあらゆるサポートを得ながら自宅で暮らす過程について記述する。そこで、その過程を私の訪問看護師としての体験をもとに、エスノグラフィーの手法、現象学的記述、エピソード記述の方法を参考にしながら、章立てて記述してまとめたものを以下に提示する。今回の完了報告書提出時点では、まだ研究の途中経過である。以下の文書は、その一連の流れをまとめたものの報告である。これからは、この探求を繰り返し続け、先行文献のレビューも加えながらまとめたものを、2018年1月5日までに修士論文として提出する予定である。